第3節　小森山支群第98号墳出土の靫

栗　林　誠　治

1．出土状況

主体部床面からは、約44×88cmの範囲に広がる有機質の遺物が検出された（第62図）。この遺物は3種類の有機質から構成されている。まず、幅1.2cmの漆が塗布された棒状木製品で、一部は束ねられている。この棒状木製品に直交する形で検出された板状木製品には、黒漆が全面に塗布されている。さらに有機質そのものは遺存していないが赤漆膜が検出された。この漆膜には皮革に塗布した際に見られるような毛穴の痕跡は認められず、木目状の筋が観察されることから板状木製品に塗布されたものと考えられる。

北側には、主軸方向に伸びる数本の棒状木製品を上下に挟むようにして板状木製品が検出された。この板状木製品は木目が棒状木製品に対して直交していることや、検出状況から2枚の板材であることが伺える。これらの東側には、木目が主軸方向の板状木製品が検出された。これらから約30cm南側には板材（木目は主軸直交方向）を敷いた状態で、10数本の棒状木製品が並列して束ねられている。赤漆膜は棒状木製品の上にも広がっていることら、赤漆を塗布した板状木製品が存在したことを伺わせる。

こうした出土状況から、棒状木製品は矢柄、板状木製品は棺材の一部もしくは箱状木製品と考えられる。しかし、板状木製品は木目から側板も確認でき、しかも矢柄を挟んだ状態で約44×88cmと限定された範囲から出土していることから、矢を収納した状態で副葬された盛矢具と考えるのが妥当である。

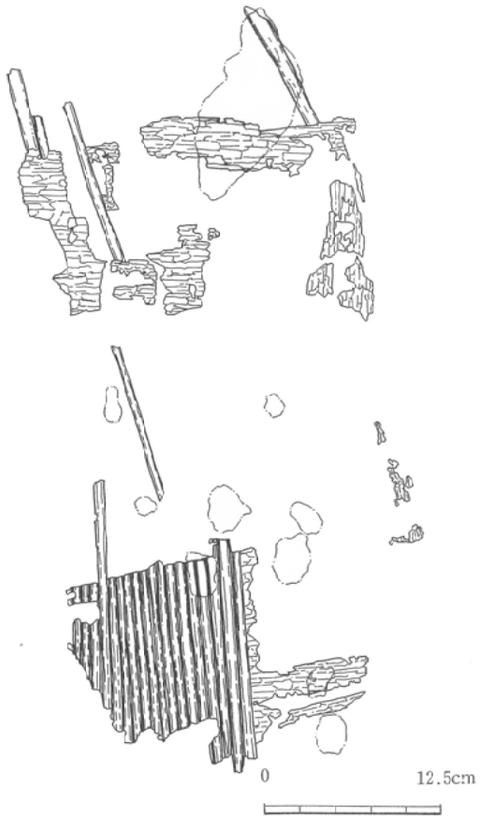
2．靫の復元

古墳時代の盛矢具には胡籙と靫の2形式があり、当古墳からは盛矢具金具が出土していないために胡籙・靫の判別は容易ではないが検討をおこなう(1)。

盛矢具の形態を復元すると約70×32×8cmの断面が長方形の矢筒となる。幅が32cmの盛矢具となると靫では据置式靫、胡籙では平胡籙が想定される。田中氏の分類のうち「A VI類　横長帯飾金具」が平胡籙金具に相当し、山王山古墳、巨勢山ミノヤマ2・12号墳等から出土しており、6世紀中葉を前後した短期間に盛行する。ただし、矢柄を盛る矢立は、非常に浅く鏃身部のみが収まる程度で(2)、しかも金具を伴う。このことから当墳の出土状

況には合致しない。

一方、6世紀の靫となるとタカバン塚古墳、八幡大塚2号墳出土例等の半円形鉄製底板責金具を伴う携帯A式織物製I式や、館山2号横穴墓、経僧塚古墳、柳瀬1号墳、上塩冶築山古墳、御崎山古墳、古津賀古墳、宮の上4号横穴墓出土例等の規格性の高い方形鉄製底板責金具を伴う携帯A式織物製II式が中心となる。しかし約32×8cmの断面が長方形の矢筒となると、据置式靫が想定されるが、携帯式靫の法量は当墳復元案より小型である。



第62図　第98号墳主体部出土靫実測図

復元案や底板責金具が出土していないことから考えると、烏土塚古墳からも出土している「据置B式木製II式1類靫」が妥当であろう。正面観は垂直型で、飾板・箱形飾が伴わない。底板が長方形B型の形態を採る黒漆塗木製矢筒である。出土状況からすると矢筒の正面と裏面には木目が横方向の板材を使用し、側面には木目が縦方向の板材を使用している。なお、部分的に赤漆が検出させていることから矢筒正面には直弧文系の円形鍵手文、同心円文等の文様が赤漆により施されていた可能性もある。時期は靫編年の第IV期後半に相当する。当墳からは鉄鏃は出土していないが同型式の靫を出土した烏土塚古墳出土の鉄鏃がX期(3)で、周溝出土土器の年代とも矛盾しない。

この据置B式木製靫は第II・III期には確認されておらず、出現期の雪野山古墳出土例（据置B式木製I式1類）以降の系譜を追うことができない系列である。ただ、装飾古墳に見られる靫はこの据置B式系の可能性があり、この系譜が完全に途絶えたわけではないことを伺わせる。この小森山支群第98号墳出土の「据置B式木製II式1類靫」がいかなる経緯で出現したか今後の検討が必要である。

（1）胡籙金具の関しては、田中新史「古墳時代の胡籙・靫金具」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』言叢社　1988　による。

靫に関しては、拙稿「古墳時代・靫の分類と変遷」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要　真朱2』　1993　による。

（2）古墳出土の胡籙矢立は類例は知見しえないが、正倉院御物の中に葛胡籙があり、平胡籙の形態を復元し得る。

（3）杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8集　1988

写　真　図　版